# 厚生文教常任委員会会議録

１　日　　時　　平成３０年５月２９日（火）
　　１０時００分開会　　１３時５９分閉会

２　会議場所　　役場３階第１委員会室・清水高等学校

３　出席議員　　委員長：安田　薫　副委員長：北村光明（遅刻 10：04～）
　　委　員：大谷昭宣、原　紀夫、奥秋康子
　　議　長：加来良明

４　事務局　　事務局長：佐藤秀美、係長：宇都宮学、主任：鴇田瑞恵

５　説明員　　教育長：伊藤　登、学校教育課　課長：神谷昌彦、課長補佐：本田雅彦
　　清水高等学校　校長：平野道雄、教頭：山内章裕

６　議　　件

（１）所管事務調査について
　　・清水高等学校の振興策について

（２）その他

７　会議録　　別紙のとおり

厚生文教常任委員会　【開会１０：００　閉会１３：５９】　　平成３０年5月２９日

委員長（安田　薫）： 厚生文教常任委員会を開会する。所管事務調査について、今日は清水高等学校の振興策について、教育委員会より説明を受け、その後高校へ行き、昼食をとり、午後からまとめをしたい。時間内に進行できるよう、委員の皆さんにご協力お願いしたい。学校教育課より、説明員の紹介と説明をお願いする。

## 議件（1）所管事務調査について

・清水高等学校の振興策について

【学校教育課（１０：００～１０：３９）】

学校教育課長（神谷昌彦）：今回の調査事項である清水高等学校の振興策について、本日説明員として、伊藤教育長、本田学校教育課長補佐、私の３名で出席している。清水高等学校の振興について説明する。皆さんご承知のとおりだと思うが、平成９年４月にこれまでの普通科・酪農科から総合学科に転換されることに伴い、清水高校が将来とも魅力ある学校であるために各種支援活動を行うことを目的として平成８年の６月に清水高等学校振興会が設立された。町としてその振興会に補助をしている。別紙資料に基づいて説明する。主に振興会の補助の内容等について説明し、後ほど清水高校のほうから学校活動状況についてご説明いただける。まず資料の１頁、清水高等学校振興会の会則になっている。既に何回か所管事務調査が行われていて説明されていると思うが、改めて説明する。清水高等学校振興会については、先ほどのとおり清水高校が平成９年４月から総合学科に転換されることに伴って、清水高校が将来ともに魅力ある学校であるために、各種支援活動を行うことを目的に平成８年の６月に設立されている。主な活動等については会則の３条に記載されているが、高校の支援、協力、啓蒙活動をはじめ、関係機関への陳情活動、更には町内の小中学校との連携支援活動など、目的に沿った活動を継続的に行っている。第４条の会員の構成については、町内各小中学校のＰＴＡ、高校の同窓会、各中学校、高校の学校長で構成されている。町のほうから役員として、町長と教育長が参与ということになっている。事務局員として企画課長、学校教育課長、学校教育課長補佐が入っている。事務局は高校に置かれていて、教頭先生が主の役割を務めている。次に３頁。平成 29 年度の清水高等学校振興会の決算。平成 29 年度の収支状況については収入が 2,709,698 円の予算規模となっていて、そのうち 2,540,000 円を町からの補助金でまかなっている状況になっている。支出の主な使い道としては、事業費として、旅費は生徒募集のための管内中学校訪問、あるいは進学、進路等の開拓等に対する旅費として 676,883 円を支出している。印刷製本費としてリーフレット、学校通信である「彩雲」、訪問時の資料作成による印刷製本費が 79,489 円の支出となっている。そして進路支援費として資格取得検定料補助、模擬試験補助、講習テキスト等進路支援経費、インターネット進路講習の受講費用補助ということで、1,669,546 円支出している。次のページの資料１、振興会からのお知らせということで、各種検定料・模擬試験料の一部補助というものがある。中段の四角に書かれているが、平成 29 年度の補助の実績としてそれぞれ進路検定あるいは模擬試

験にトータルで 363 名の生徒が補助を受けている状況。３頁に戻り、広報事業活動として総合学科を語る集い、１日体験入学、広告看板書換等の広報事業として 176,304 円を支出している。簡単だが、以上が振興会の平成 29 年度の収支の状況。平成 30 年度については予算審査のときにも説明しているが、清水高校の４間口維持のため、進学希望者に対する支援を充実する。今年は総合学科となって 20 期生が卒業する節目の年。今年度、清水高校の特色である生産技術系の成果を町の活性化に活用していくための事業を行うことを予定して、振興会の活動をさらに支援するということで町からの補助金を 1,460,000 円増額して 4,000,000 円となっている。支援内容は今後振興会の役員会を開いて総会で決定することになっている。現時点で清水高校と協議している中身としては、進路支援として、国際交流派遣補助として清水町の国際交流協会が実施しているアメリカのチェルシーへの派遣事業について清水高校までも範囲を広げて高校生にも行ってもらおうということでその旅費に対する補助を考えている。インターネット進路講習受講費用の補助として、資料３に「スタディサプリのご案内」というものがある。これはインターネットを通じて有名予備校講師等のいろいろな進学等の講習を受けられるもの。現在は生徒個人のスマホだとかを利用しながら受講している状況だが、清水高校にインターネット環境を整備して、このスタディサプリを受講できるタブレットを 25 台程度振興会を通じて設置をし、生徒が自由に使いやすい環境で講習を受講できる、あるいは授業等でも活用できるように、進学あるいは公務員試験対策に役立ててもらいたいと考えている。従来行っている資格取得検定料の補助、模擬試験補助、講習テキスト等の進路支援経費についても予算を増額してより多くの生徒に検定等を受講してもらいたいということを考えている。広告事業として、地域連携推進事業として地域のイベント、アスパラまつりだとか十勝マルシェ等の出店、今年度 20 期生の卒業記念ということで、清水高校で清高ショップというものを計画している。こういったものに対する事業補助ということで支援していきたい。これから総会で最終的に決定をするが、そういった内容で支援を強化していきたいと考えている。特に進学者、今チャレンジクラスというものもあるので、そういったほうに先ほどのインターネット等の講習を利用して進学の充実を考えていきたい。高校振興会とは直接関係ないが、資料２にある募集チラシで「清水高校へ通いやすくなります」ということで、今屈足地区から通学されているお子さんがいるが、そういった方が通いやすいように屈足のセイコーマート前からスクールバスの乗降ができるというかたちで平成 30 年度から取り組んでいる。次に、振興会には関係ないが、資料４～７までを簡単に説明する。高校配置計画検討資料ということで、これは４月に行われた平成 30 年度公立高等学校配置計画地域別検討協議会というものがあり、そこで示された資料。まず資料４、一番目に中卒者の状況及び調整計画ということで、資料の上にそれぞれ十勝管内の各市町村の中卒者数の状況が載っている。真ん中辺りに平成 30 年度ということで載っており、清水町もちょうど真ん中くらいに載っている。清水町においては、平成 30 年度の中卒者が 81 名、今後を見ていくと来年以降、77 名、76 名、76 名、平成 34 年には 61 名となり、35 年には 77 名ということで若干増えるが、その後、67 名、64 名となる。今後平成 37 年までには清水町で中学生が 17 名減るという状況。そして十勝管内全体でいくと平成 37 年までにこれから 301 名の中学生が減ってくるという状況が示されている。次に資料５、十勝学区における進学者の状況ということで、これは速報値になっていて私立学校とか学区外に行った生徒はまだ集計ができていないが、

平成30年度の状況。一番左側に学校名があり、中段から少し下に清水高校がある。これを横に見ていくと、帯広から清水高校に来た生徒が30名。音更、士幌、上士幌はいなくて、芽室町から25名、鹿追からは０、新得から４名、清水からは35名来ているという状況。一番右に行くと、今年はトータル97名が入学している。縦に上から見ていくと、真ん中くらいの十勝２というところに清水があり、清水町の中学卒業生が、例えば帯広柏葉高校には２名、三条高校には12名というかたちで、清水中学校卒業生が進学した学校の内訳になっている。清水高校には35名入学したという状況。私立学校と十勝学区外に行った生徒はまだ集計できていないが、このような状況になっている。ちなみに、昨年帯広から54名来ていたが今年は30名ということで24名減っている。音更からは昨年３名いたけれども今年は０。芽室町からは昨年29名いたけれども今年は 25 ということで４名減っている。新得からは今年４名となっているが昨年は12名いたということで、この辺が大きく減った原因になっている。昨年から減って97名になった理由として、これが理由かどうかはわからないが、私立高校の真ん中辺りにある大谷高校というところを見ると定員数が 260 名になっている。それが、一番右側に行くと入学者数が336名ということで、定員より76名多く入学者がいる。昨年からみると大谷高校で 110 名ほど多く入学者がいるということで、その影響があって帯広から清水高校に来る生徒が大きく減ったのではないかと推測できる。資料６はそれぞれ学区ごとの移動。真ん中の十字が十勝学区なっていて、その中でも、旧第１学区、左側の鹿追・新得・清水が第２学区となっている。一番左側の下から、学区外から十勝学区に来た生徒が130名。右側の十勝から学区外に行くのが169人いるということ。真ん中の旧第１学区から例えば鹿追・新得・清水の第２学区については、昨年の数字ではあるが、第２学区から帯広市のほうに73名行って、逆に帯広市からの旧第１学区から清水のほうには 103 名来ているという状況。今年度については帯広方面からこちらの旧第２学区、清水のほうに来られたのが 70 数名ということで、30 数名減っているという状況になっている。最後の資料７が、地域別検討協議会の学区別検討資料ということで示されている。一番上のほう、学区内の中学卒業者ということで平成30年度から37年度まで載っている。31年度は13名の減、32年度は93名の減、33年度には前年度より 113 名の中学生が減るということ。その後プラス４、プラス13ということで若干増えるが、それもまた 36 年度にはマイナス 40 人、37 年にはマイナス 59 人ということで、十勝管内で中卒者が37年までに300名程度減っていくという状況が示されている。そこで、例えば平成33年度の中段ちょっと上になると、２～３学級の調整、そして平成 34 年～37 年までの４年間で１～２学級の調整ということで、これは単純に中卒者数の減る分を機械的に減らしたということなので、それぞれの学区内、地域の状況に応じて検討される。今後の中学卒業者数の状況からいくと、平成37年までに最大で５学級程度の減の調整が図られる状況になるかということで、今後やはり厳しい状況が続くと推計されている。以上、簡単に検討資料について説明した。今後も振興会に対する補助の継続を行い清水高等学校の幅広い進路希望に対応が可能となるように、総合学科の維持継続に向けて引き続き町としても支援をしていきたい。

委員長　：課長は簡単にと言ったが、十分聞き取れたのではないか。時間制限もあるが、できれば要約をして質問してほしい。

北村委員：今年度の平成30年度は４学級の間口のところ、応募者が少なくて実質３学級並みの人数になったのではないかと承知しているが、結果的には学級そのものは４学級で運営

されているのかどうなのかということと、教員の配置数について変化があったのかどうかお聞きしたい。

学校教育課長：資料にもあるが、入学者数は97名ということで学校の定員としては３学級ということになっている。清水高校ではそれを４学級維持ということで４学級に編成して運営しているところ。ただ、教員も定員上は１学級減ということになるので、このままでいくと教職員が減になっていくそう。ただ、来年以降４学級ということになればそれを抑えられるということ。詳しいことは高校で聞いてもらえれば教員の配置についてはわかると思う。そういった意味で、道教育長が６月１日から新しく変わられるということで、新しい教育長が清水町の御影出身の方ということもあり、６月４日（月）に町長と教育長と私で新しい教育長と面会をして、高校の振興についてもお願いをしてきたいと考えている。

委員長　：教員数は変わっていないということか。

学校教育課長：今年度１名教員を減らされているという状況がある。

奥秋委員：今のところ定員は減で間口は４間口ということだが、間口の調整というのはどこでどのようなかたちでやっているのか。

学校教育課長：北海道教育委員会のほうで状況を見て定員を決定する。本当であれば今年120人を超えなかったので３間口となっている。このままいくと来年以降は３間口ということになってしまう状況がある。今のところ、来週北海道教育委員会のほうで教育長にもご挨拶をしてきたいと思うし、来年以降も４間口での募集ということでいろいろ働きかけをしている。来年は何とか４間口の定員で募集できないかとお願いをしているところ。

奥秋委員：そういう中で今回入学者が間口に満たなかったということは大谷高校のほうにもかなり流れたということもあるが、今の説明だと100人を超える人たちがそちらのほうに流れたということ。けっこう間口を超えているが、それに対しては道のほうでは指導とかそういうことは一切無いのか。

学校教育課長：先ほど十勝の地域別検討会議があってそのときに町長が質問したが、各学校の定員については公立学校と私立学校で年４回ほど協議を行ってその中で中学卒業者数などを見ながら定員を決めており、入学者数については、私立高校に対して道の教育委員会としては何も言うことはできないということ。どういう状況があって定員を大きく超えた入学があったのかというのはわからない。その影響を清水が受けてしまったのかと考えている。

奥秋委員：資料２の中に「高校へ通いやすくなります」という屈足のほうまでバスが配車となったが、いつの時点でこういうことが検討されたのか。以前新得のほうからこういう要請がたぶんあったように聞いているが、それがなかなか実現できなかった。新得のほうからも今まで12名だったけれども今年は４名になってしまったというのも、ちょっとタイミングが遅かったのではないかという気がする。そういうことはないか。

学校教育課長：私が来る前だったが、確かに新得の屈足地区のほうから要望があったようにも聞いている。今年から始めたが、今年はたまたま屈足地区から清水高校に来られる方がいなかったということもあって、これが遅れたのが原因なのかはわからない。新得のほうになぜ今年減ったのか聞きに行ったときには、たまたま今年希望者がいなかったという状況で、これが原因だったとは言われていなかった。この辺が原因したのかどうかというのはわからない。

奥秋委員：けっこう早くからこの要望があったように思う。やはりそういう要望があった時点で迅速に対応してほしい。１人の生徒を大切にする思いもやはり今後もしていただきたい。

原委員　：清水高校は数年前から習熟度別の教育を展開していて、別クラスで上位の者を募って国立大学を含めて大学に入れる努力をしていると思う。その辺について、現状でうまくいっているのか。

学校教育課長：高校のほうが詳しくわかるかと思うが、昨年からチャレンジクラスということで取り組んでいるので、今回も振興会として先ほど言ったスタディサプリだとかそういったものの講習を受けられるようなかたちで支援を強化していきたいと考えている。今後そういった効果が出てくるのではないかと考えている。

原委員　：教育委員会で押さえているか、学校に聞けばいいか定かではないが、高校の偏差値がここ数年間で動いているのかどうかは教育委員会として押さえているか。

学校教育課長：高校の偏差値については、教育委員会としては押さえていないのが実状。

原委員　：実は私、今回以前から清水高校の校長とも話したことがあるし、帯広南商の校長とも話したことがある。清水、新得、鹿追、芽室、例えばこの４校で見てみたときに、そういう効果があって上位のほうにいるのかと思って調べたところ、全く上位ではない。たぶん教育委員会も押さえているだろうと思ったが。清水は偏差値 41。新得と鹿追は 40 で、芽室は 48。ちなみに帯広柏葉は 65 で、帯広三条が 61 で南商は 55 で、本別は 52。何が言いたいかというと、先ほどから間口が減ったら困るという話しがあるが、清水高校で子どもの学力が伸びないと、お金がかかっても絶対に帯広に行く。私立高校の大谷高校が伸びたのではないかと説明されたが、経済的に余裕のある父兄がたくさんいて、清水に来る予定の方がそちらに行ったのかもしれない。清水高等学校の学力を上げることが課題。「清水は頑張っており、学力が上がっている」ということになれば、近くの清水、新得、鹿追の人は帯広に行かないと思う。その努力をどの程度しているのかについてこれから高校に行って尋ねたい。補助金の金額を上げて努力しているのは重々承知しているが、その辺を明確にして高校と連携をとってやってもらわないと３間口になんて黙っていてなる。先ほども言ったように生徒数が減っていて奪い合いになっているのだから、その辺をやはりしっかりしてもらわないと。外国へ連れて行くとか補助していくとかその辺ばかり集中していると学力は伸びないと思う。要は高校へ入った子どもがやる気を起こして努力をしないと絶対に伸びないと私は思っている。教育委員会としても今までと違って力を入れる方向を軌道修正してもらって、高校とよりタッグを組んで全町的なものにしないとまずいのではないかと思う。

教育長（伊藤登）：言葉が悪いかもしれないが、生徒というのは上位と下位がいる。間口だけにこだわっていると下位が入ってくる可能性が多い。間口にこだわることは当然町の政策として非常にいいことだと思うし、学力向上について質の向上という部分も大事なことであると思うので、その辺も含めて今後検討しなければいけない。高校と連携しながら質をとるか間口をとるかということも考えていかなければいけないと思っている。今はどちらかというと質のほうを向上させようという部分もある。間口維持はもちろん表面に出ていて、チャレンジコースとか高校といろいろ連携しながら、補助金をつけながらやっているというのが現状。今後も両にらみでやっていかなければ間口もだめになるし、学力向上もだめになるということが考えられる。しっかりと高校と連携してやっていきたいと思っている。

原委員　：私の考えと同じ話をされているので、これからよろしくお願いしたい。就職関係を見ても、確かに今子どもが少ないということで、どこでも就職できるという言い方は酷かもしれないが、100％になって当たり前。97％だからすごいですなんてことにはならない時代。特にこの就職先についても、例えば十勝管内で実施している町村役場の職員の採用試験をどんどん受けてもらって、清水町の臨時職員ではなくて正職員になってもらうような子どもが出てこないとまずいと思う。今清水町役場の職員なんてほとんどほかから来ている人が多い。町のフォローは相当弱い面があるのではないかという気がする。したがって、そういう子どもが出てきて清水町役場の正職員に３人も入ったというかたちにならないとまずいと思う。臨時職員をちょこちょこ入れているが、それではまずい。前の町長は私がこういう話をするとすぐ、試験さえ受かってくれたらいつでも町は採用すると言っていたが、そんなことではなくて、町も影からしっかり支えてやらないとまずいだろうという気はする。来年あたりは清水町役場に十勝管内の職員採用で３人も入ったというような雰囲気をつくってほしいということをこれから出向いていく高校の校長にがっちり言っておこうと思っている。

教育長　：その通りだと思うが、試験だけで見るというよりはむしろ高校のほうで就職する生徒に向けて公務員の受験対策とか、いろいろなことをやっていただければまた違ったことが出てくるのかと思う。その辺も含めて連携していきたい。

委員長　：教育委員会に関しては以上で終わりにしたい。休憩する。

【休憩　１０：３９】

（清水高等学校へ移動）

## 【清水高等学校視察（１０：５２～１２：２０）】

【再開　１０：５２】

委員長　：会議を再開する。今日は清水高等学校の振興策について、厚生文教常任委員会の所管事務調査ということで、今役場のほうで教育委員会学校教育課から、清水高校振興会への支援等について説明を受けた。このあと 12 時頃までの時間で、清水高校における振興策等についてしっかり勉強をしていきたいと思う。清水町議会としても共に清水町のために清水高校の活性化をお願いしたい。

（厚生文教常任委員会委員の紹介）

委員長：　清水高等学校から説明をお願いする。

平野校長：お手元に「清水高等学校 学校の概要」という資料と、別綴じで「清水高校の魅力を一層高めるための取組状況」という資料がある。まずは「学校の概要」という資料を説明する。資料の表紙は、本校の生徒が頑張ってやってきた花壇整備の写真。１頁目は生徒の状況。（１）はいろいろ心配をいただいている入学者の資料。今年度は入学者 97 名ということ３クラスのスタートになっている。ただ後ほど校内をまわるとわかると思うが、１年生３クラスではあるが４つにホームルームを展開し、これまで以上にきめ細かい指導をしていくということで対応している。人数が少なければいいというわけではないが、本校も少人数指導というのを一つ大きな目玉にしている。先生の負

担にはなるが、大きな人数をできるだけ、少人数で指導することで教育的な効果を高めるということでやっている。97 名の入学者数の細かい内訳を別綴じの資料に準備しているのでご覧いただきたい。これは中学校別の過去３か年分の入学者の状況を整理した表である。昨年度まで 143 名、135 名ときていたのが今年度で 100 名を若干切るかたちになった。全体的に人数が減っているといういわゆる少子化の影響を直撃しているということもいえるが、御影中や芽室中だとかはこれまでと同じ数か、これまでよりも多く来ている状況がある。逆に、新得町、帯広市というのが今年度かなり生徒が集まらなかったという状況。その右側は町ごとに整理をした表になる。清水町からはこれまでと同じくらいの割合で来ていただいて、ここ３か年の割合・人数でいえばちょっと多く来ているというところなので、町との連携については順調にいっていると思う。逆にいえば、町外の生徒の集まりがよくない。こういった状況をふまえて、（２）にあるように、３月下旬には各近隣の中学校長から聞き取りを行い整理した。評価できる点と課題を白丸と黒丸で整理した。各中学校とも、総合学科の趣旨には理解を得られている。中学校からの期待も非常に大きい。特に総合学科に入ってから、科目選択、系列選択が進んでいくので、今中学校を卒業する時点で普通科に行く、職業学科に行くという明確な意志を持っていない子たちも希望するような状況が生まれているということなので、これまでの総合学科になってからの 22 年間の成果が非常にあると感じた。一方で黒丸のところに注目していくと、本校で学習した内容と進路先との関連が十分に伝わっていない。十分本校の取組みが伝えられていない。アピールの仕方が課題であると指摘をいただいた。もう一点、地域の中学校長と同時に今回卒業した保護者からアンケートをとった分析が（３）の表になる。数字が細かくて申し訳ない。２頁目を見ると、我々としても反省だが、設問４の高校選択について、清水高校を相談されたら積極的に勧めていただけるかというところ、「Ｙｅｓ」と答えた保護者が半数を切っている。その他のほうが多い。ごく一部だが積極的に勧めないと言っている保護者もいる。逆に積極的に勧めていただけるところまで我々の教育活動の充実がまだ行き届いていないかというところ。そして設問５では、自分の子どもを入学させて良かったというのが半数以上感じていただいているが、一歩進んで勧めるところまでいけば、清水高校のＰＲが十分伝わることになるかと思っている。出身中学校地域別にもまとめてみたが、地域によっては良かったと思っているところが多い地域もある。これまでも工夫はしていたが、これらを基にそれぞれの地域ごとにどういうことが求められているのかということを踏まえながら、中学校に出向く説明会などで、より一層地域ごとにＰＲしていく。例えば、帯広市は普通科もあり職業学科もあるという地域性。芽室町は職業学科が無い。その中でＰＲする部分については重点を変えていくべきかということが分析からわかったところ。そのような、地域の声、中学校の声、保護者の声をベースに、平成 30 年度はこういう方向で動いているということが、２頁の中段以降に掲載。平成 30 年度にスタートしてからでは改善・改革が進まないので、厳しい入学者の状況だということがわかった時点で、本校ではしみず（４３２）の「縁（えん）プロジェクト」をスタートして改革に向けて動き出した。１の地縁というのは、地域との連携。２の血縁は保護者。３の学縁は卒業生。４のはＩＴ縁はいわゆるパソコン、ホームページ、インターネットを使った繋がり。そういう繋がりを大切にして平成 30 年度をスタートさせる助走を始めたのが今年の１月。このプロジェクトは３月末で解散して、それぞれで「こんなことができる」「あんなことをし

たい」ということを集約して、平成30年度にスタートさせる学校経営の基本方針等に生かしたり、次の頁を見ると重点事項と具体的方策にして整理をしたところ。ただ、こうやって見るといっぱいあるので、なかなかどれをやるのかというのが具体的に見えないので、これらのことを進めていく上でのキーワードを出した。真ん中の図がそう。青、オレンジ、緑の部分は重点事項と具体的方策の１、２、３に対応して、それぞれが実は関連性があるので、それをぐちゃぐちゃっとしてまとめていくと下の３つの重点事項の具体的方策の３つの柱に整理ができた。一つ目は、「教科・系列の連携による社会で通用する人材育成」。２つ目は、「ＩＣＴ活用による働き方改革・学び方改革」。３つ目は、「地域との具体的な連携による開かれた学校づくり」。今までやっていないわけではないが、特に平成30年度で重点を置いて取り組むことで、清水高校の魅力が高まるのではないかというところ。最後に、魅力を高める取組状況ということで、（１）の教育活動の充実が３点。「①地域連携の推進」、「②文化・スポーツの活性化」、「③国際化や情報化に対応する人材育成」。①、②、③の３つに整理して今まさに動き出しているところ。中でも②の文化・スポーツの活性化については、いわゆる部活動の魅力ということで中学生が学校を見る上で重要だというところがある。ところが、学校というのは教員の専門性と部活動が必ずしもマッチしない部分がある。本校で苦手な部分については、専門的な助言やアドバイス、指導のお手伝いが必要かということで昨年度末以来、町教委に相談している。例えば演劇部の顧問については、今年度２人抜けたが、地域の方で詳しい方がおり、早速４月から来てもらって、４月の公演、その後の活動もボランティアで見ていただけるような体制ができた。アイスホッケーについても地域の方にコーチに就いていただけており、我々の弱点の部分、苦手な部分を町のほうに人材を出してもらうとか、紹介してもらうという活動をしている。ほかの部分についても振興会を中心に町の支援、補助などをいただきながら、平成30年度でこれから更に進めていく。（２）教育活動の発信力の強化については、せっかくそういった活動が充実しているので積極的に新聞などにも載せていただく、取材をお願いするというのも今年度更に力を入れている。最近保護者や子どもたちはホームページを見ることが多い。我々もホームページについて十分にこまめな更新というところまでいってなかった。そのあたりもきちんとできる体制を構築していかなければいけないというところで平成30年度がスタートしている。先生方も含めて生徒も非常に頑張りを見せているところ。以上でこの資料の説明を終わる。最初の資料に戻るが、昨年度までの取組みをまとめたものが掲載されている。お気づきかと思うが、今年度こうやるとは言っているが、昨年度からやっていたことを更に充実させていく。新しいことはとても負担がかかるが、今あるものをベースにして、これは更に今年度充実していくということをご理解いただきたい。１頁は先ほど話したので、２頁以降について概要だけ説明する。２頁目は教職員の状況。年齢構成、経験も非常にバラエティに富んでいて、学校としては非常に安定感のある教職員の構成になっているかと思う。２頁の下の部分が広報活動の実施状況で、学校通信の発行を定期的に行っている。３頁目の上段は、生徒募集の活動状況で、実際に中学校訪問と学校説明会を頻繁に行っている。最近中学校のほうでも学校説明会に来てほしという声がかかるので、かかったら必ず行くようにしている。下段は教育活動の連携授業ということで、昨年度のものだが、公開授業を２回やったり、あとは町教委とも連携して、くらしのステップアップスクール、幼稚園、保育所との連携、ＪＡ女性部との連携に取り組んでいる。更

に、４頁の下のほうでは、学力向上連携等ということで実は我々もいろいろなところに生徒を行かせて、それぞれの小中学校の教育活動をサポートするという内容。本校の生徒にとってそういう機会というのは非常に重要。今求められる力、学力の中では、アウトプット、いわゆる説明したり発表したり、他者に対して発表ができる。ひっくるめて言えば外へのコミュニケーション能力になる。そういったところで我々も声がかかったらこういう手伝いがほしいとか、こういう人がほしいということであれば、積極的に出ているところ。５頁目の上段にある進路指導活動状況は関心の高いところかと思うが、後ろにつけている新聞記事にもあったが、国公立大学は昨年度３名という結果を出している。例年コンスタントにここ７・８年は出ているが、今年度も確実にそういう進路目標を達成しているところ。中段は振興会からの支援の状況。今年度はこの後、来月には役員会・総会があるがその中で私どもの希望も含めながら事務局の方にはご苦労いただいて我々の教育活動への多大な支援ということで進めていただけるということなので、本当にありがたい。５頁の後半、部活動の顕著な活躍については、次頁更には７頁まで含めてこれだけの部が精力的に活躍をしている。７頁の最後のところにあるが、今年度卓球部が一人全道大会に個人で出ることになる。放送局でも全道大会に出ることになった。土、日の高体連では陸上部が６名全道大会に出場することになった。昨年度は１名、やり投げの女子。その子も含めて今実績として上がっているところ。次の頁以降は昨年度末からの活動で新聞記事等に掲載されたものをひろい出している。昨年度の状況、今年度の取組みを始めている状況について説明をした。総じて言えば本当に町からの補助というのが我々にとっては教育活動の充実に非常に役立っている。入学者が今年度は少ないが引き続き教育活動の充実を図り、それを広められる活動を通してまた魅力をつくっていければと思っている。これで説明を終わる。

委員長　：ただいま清水高校の平野校長より説明を受けたが、説明に対して質疑を受ける。

大谷委員：アイスホッケーはかなり一生懸命やっているが、アイスホッケー留学というか、その関係で来ている生徒はどれくらいいるか。

平野校長：制度上はないが、本校に保護者とともに来るということで、いわゆる道外生の扱いではない。実際に道外の中学校出身の子でいえば、年によって上下はあるが 10 名はいない。５名前後が毎年の数。道外はほとんどいない年もある。

加来議長：学校教育課の資料で道外がゼロだったのは、親も来ているから道外扱いになっていないということ。

委員長　：中学校から来てそのまま継続して清水高校に入ると。

北村委員：今年帯広からの清水高校への入学生が少なかったというのは、学校としてはどういう分析なのか聞きたい。

平野校長：先日道教委が来て、地域別検討協議会が帯広で行われた。その中でも話が出ていたが、私立の入学者確保がすごく力が入っていたと聞いている。中学校に聞いてもやはり私立が毎月のように来て魅力を伝えていく。だから私立に行きなさいという指導は中学校ではもちろんしないが、どうしても情報量として大きくなったことが要因なのかと思う。帯広三条高校が間口減になったので、その分三条高校の希望者が減るかと思ったら、それはあまり減らずに受けて、第二志望で私立をかけてだめだった子は私立に行く。私どもの期待した二次募集でというのも、なかなかそこまではいかなかった。私立の攻勢というところにあろうかと思う。

北村委員：新得の関係で、新得はやはり地元の新得高校に入るという力が入っていたのか。

平野校長：新得からは、去年・一昨年10名近く来ていて、今年度は激減して半分くらいになった。中学校に聞き取りをすると、言葉を素直に言うと、たまたま帯広市内の希望者が多い学年だった。これが毎年続くかというと、全然安心するつもりはないが、そういうわけではない。新得高校はもう募集停止になっているから一番近い清水高校に目が向くようになればいい。我々もこれまで新得高校があったのであまり踏み込んでいくことはなかったが、新得中学校に行く機会を増やしたり、町教委に行ったり、進路状況も伺ってということで動いている。

北村委員：清水高校といえばアイスホッケーがある程度関連づけられて注目されている。文科系でいくと、例えば書道だとかエッセイだとかに出る文学、文芸系を見ても、そういった特徴というのが知られているのかどうなのか。

平野校長：実は体育系だけでなく文化系も非常に頑張っている。演劇部は数年前全国大会に行ったし、美術部も全道大会の出展が常連化している。ほかの部も同じように活動している。新聞局が推薦を得て今年度全国大会に出るようになった。なのでもしかするとこの頑張りが十分伝えられていないのかというところ。我々が今狙っているのが、新聞等にどんどん提供することと、町、町教委との連携の中でその文化部の部活動を手伝っている人がいるということでそういった繋がりがあり関心も高まろうかと思う。例えば町教委には本校の書道部のＯＢがおり、趣味が書道で、たまに「遊びに来てほしい」と、そんな繋がりを大事にしながら広がっていくのも期待している。文化系も体育系に負けていないけれども、「優勝した」「勝った」というのは新聞に取り上げられやすい。それに負けずに広報活動をしていこうと思っている。

北村委員：今年清水町議会で広報広聴常任委員会というのが設置された。議会だよりをもう少し町民に開かれた内容にするということで、課題としてある。その中で例えば清水高校の新聞部の評価を受けるとか、意見をもらうとか、そういうのがあってもいい。例えば個人的に言えば高校生における政治教育ということで、議会はどうなっているのかを知るために、高校生による模擬議会をやっている町村がある。自主的に高校生が企画してつくっていく。実際には理事者側の答弁なんかをやっているところもあるので、そこまでいきなりいくかどうかわからないが、清水町議会でそういう方向に向けて考えていきたい。何か協力できることというか、こちらが協力してもらうことが多いと思うが、よろしくお願いしたい。

原委員　：私は清水高等学校がここ数年習熟度別の授業をしたり、特別クラスをつくって学力を上げる努力をしていると理解をしているが、ここ数年間を見て、偏差値がどういう動きになっているのか。毎年少しずつ上がっているのか下がっているのかということになると、どういう状況にあるのか。

平野校長：模擬試験は基本的には生徒が希望して受けるものであるから、なかなか経年で比較するというところまでは実はできていない。ただ、確かに学力を示す指標として、本校の中だけではない他校との比較にもなるので、そこのあたりを注意しながら、いわゆる一般受験というか、学力で入れる生徒の育成に努めていかなくてはいけない。進路チャレンジクラスの１・２・３年とそろった年度となるのでそのあたりもう少し注目して、分析をしていかなくてはいけない。貴重な意見をいただいた。

原委員　：今まで偏差値を調べたことはなかったが、清水高校どうなっているのかということで、全道の高校のものがインターネットで出ているので見た。私は振興会の集まりも絶え

ず出ているので、清水高等学校は相当努力をしているということから見ても伸びているのかという気がしていた。結果的に見てみると 41 ということで、鹿追が 40、新得も 40、芽室高校が 48 という流れになっているということで考えるところがあった。実は前の校長と話をしたときに、清水中学校の生徒が清水高等学校に入学した子どもと、芽室中学校からこちらの高校に入学した子の学力差が、20%くらい清水が低いという話をされていた。いろいろとチャレンジクラスを含めて、学力を上げるための努力を相当しているという話をしたものですから、偏差値についてお伺いをした。

平野校長：どうしても本校に求めるニーズはやはり清水町と芽室町では違う。普通科がある芽室町は職業科がなく、職業の勉強をするのに帯広に行くのも清水に行くのも距離的にはそんなに変わらない。清水のほうがおもしろそうだと思う子たちがこちらに来る。職業系が偏差値が低いというわけではないが、そういう進路の希望を持っている子たちが集まりやすい。逆に清水中学校の子たちは一部帯広の三条、柏葉に行くが普通科もある地元の学校ということでおそらくそういう結果がでているのかと思う。総合学科は非常に魅力的でおもしろいが、実はどこの学校も上位層、学力の高いところを目指そうという層と、地元で就職して頑張りたい、技術を身につけたいという幅広い生徒層がある中で苦労しているのが実情。

原委員　：今校長先生が言われるように、幅広い部分が相当あるのも認識している。それに加えて別クラスをつくって学力を上げてその子たちを別口で大学に今年は３人、室工大と北見工大と教育大学。そういうかたちで努力されているのは重々承知している。その辺の数を増やしたり、あるいは就職活動で清水高校から国公立を受けて受かりましたよというのと同じように、例えば町村役場の職員の採用試験にチャレンジしていただいて、清水高校生が町の職員になるというのが幅広く出てくると、就職先としても清水高校は魅力のある高校だという認識を重々されると思う。特に清水町役場に入っている子どもを見ると、臨時職員で何年か勤めて辞めるというのが大半。以前、前町長に一般質問等含めて聞いたときも、「私は清水高校生を採用したいが、受かってくれなければどうにもならない」と。「十勝管内で試験をやっているから、その試験をクリアしてもらえれば優先して清水町役場に採用したい」という話もしていた。就職率が97%だ、100%だというレベルで話をされているが、そういうところに力を入れることによってその上のほうで魅力のある職場に定着ができるように今一度もうちょっと力を入れたほうがいいのではないかという気がしているが、その辺はどうか。

平野校長：ごもっともかと思う。我々も進路チャレンジクラスという、より選抜性の高いというか、学力を必要とするところの生徒たちは大学進路だけではない。就職もそうだし、公務員試験もそうだし、倍率が高くて受からないと思って物怖じしているような子どもたちが３年間でしっかり学力をつけてそういうところに合格できる力をつけられるようにということで進路チャレンジクラスをつくっている。大学進学だけではなく、試験を受けて難関を突破していくような力を１年のうちから意識付けするようなところでやっている。今回国公立大学３人がすごくクローズアップされているが、実はこの子たちは、入学のときには国公立を希望していなかった。キャリア教育というか将来を考えさせていく上でこういう仕事に就くんだったら大学を出ないとだめなんだというようなことで１年の夏くらいから気持ちをぐっと高めてチャレンジしたという面がある。我々の学校の教育力については自信を持っているところ。最初から希望している子たちが行くのももちろん大事だし、希望がなかった子たちが高い目標に、公務

員の試験も含めて、「こういう仕事は大事なんだな、やろうかな」というニーズに応えられる教育活動をこれからも提供していきたいと考えている。

原委員　：今校長先生が言われたことは一番大事だと思う。いただいた資料に「清水高校 国立大学３人」と書かれた新聞報道があったが、この後段に書いてあるように本人が努力しないといけない。帰ってから３時間勉強して、土日は８時間から 10 時間勉強したと。こういう積み重ねがあって、本人の身になって受験して受かるというかたちを本人がしっかり自覚して努力するという姿勢がこのように芽生えなければ何の意味もない。バックについている教員がそれをサポートしているという味方がいれば、「清水高校はすごいことをやったな。去年３人で 10 人受かった」というようなことだって私は可能だと思う。就職関係で以前も話したことがあるが、離職率が非常に高い時代であるが、今日見たところ、離職率は半分。全道的に見ても高いほうではないということで一安心したが、やはり採用する側から見ると清水高校の卒業生を採用したけれども全然だめだという評価を受けるともう次の年からはない。実は農協の幹部と話したことがあり、「南商の卒業生はすぐ使える。ほかの高校からきた子を使うというのは一人前にするのに相当手こずる」という話を聞いたことがある。特に清水高校というのはそういう面から見ると案外広く指導されているので実践力もあるし、資格も取れば定着してもらえるのではないかと思う。

平野校長：離職率については我々も誇らしく思っているがゼロではない。これまでもそうでだったが、入ってから社会に通用する人材の育成をこれからも続けていきたい。関係の事業所、会社さんとお話をして、何が足りないのかというところも洗い出しながら、ちょっとずつ見直していかなくてはならない。

奥秋委員：校長先生からのご説明をいただいて、本当に努力をされている。公立の大学にも希望される方ができたということは本当にいいことだと思う。資料の２頁の設問６に書いてあるが、朝早くバスとか汽車通学の子どもさんたちはやはり一番お弁当が大変なのではないか。以前もそういう話が出たが、何か高校の中で昼食が用意できるものがあれば、なお汽車通学も楽になるのではないかと思う。その点について学校側としてはどのようにお考えか。

平野校長：大変難しいところ。道立高校の施設設備の関係で売店も無いし、大変申し訳ないが我々もそういう希望には今の段階ではお応えできない。何かいい方法があれば。

奥秋委員：子どもたちで販売をやるとかやはりそういうことは難しい。

平野校長：本音と建前であるが、本校でやっている実習はあくまでも実習のためのもの。お金をとって販売することを目的としているというわけではない。なかなか難しいところではある。

奥秋委員：そこら辺何か解決策があればなおいいかと思う。

平野校長：状況を見ながら。

大谷委員：それは学校でやることなのか。例えば町内のパン屋さんとかもあるが、その時間を学校に来て販売してもらうとか。そういうことも難しいか。

平野校長：かつてはやっていた。

原委員　：評価しておきたいことが一つ。私がこの町に来て 20 年近くなるが、以前に防犯協会の理事をしていたことがあり、高校生の通学について非常に厳しい対応をしたことがある。自転車は女の子を後ろに乗せて走る、踏切は電車が来たって横断していく、私は厳しいものの言い方をするので、言ったときはすっとやめるがすぐに元に戻る。そん

なことがよくあった。昨今高校生が汽車から降りて踏切を渡るときも非常に整然と３列なり４列なりで通って見事な通学をしている。すごく成長したと思っている。以前は自転車の二人乗りをしていても、距離をおいてすぐ乗っていくというような生徒がけっこういた。今はいなくなったと思う。

平野校長：地域の方々のそういう声かけもあったのだろうと思う。ありがとうございます。

加来議長：写真がついている資料ほうの３頁目の学校説明会等というところで、学校説明会、生徒募集に努力されていると思うが、どのような体制でやっているのか。町は現在振興会を通して補助というかたちで直接的には関われない部分があると思うが、もっと協力できるようなところがあるか検討されているかお聞きしたい。

平野校長：学校説明会は、本校の職員が複数名行って、いろいろ学習指導、生活指導の現状と、中学生に夢を与えるようないいところをＰＲしている。本来であれば一人で行って説明すればいいが、振興会の予算の中でいろいろと派遣する旅費も出していただいているので、活用して複数名で行ってチームで説明をしている。工夫するところでいえば、昨年度振興会で毎年やっている「総合学科を語る集い」に卒業生に来てもらい清水高校で勉強してよかったという生の声を町民の方にお伝えする機会をつくった。卒業生を説明会に行かせてもらって「ここで勉強してよかった」というような生の声を聞いてもらうのは、昨年度の語る集いでは一定の評価を得たが、今年度考えているのは、我々の教員の説明だけではないプラスの説明を加えていこうと思っている。語る集いも昨年は 12 月にやったが、中学生が進路を考えるもう少し早めの時期がいいのではないかということも校内的には振興会と相談しようかという話をしている。細かいところだが、改善をしようとしているところ。

加来議長：説明会に行くことによって、先生方に負担がかかっているとか、そういう現状はないか。

平野校長：負担がないといえばうそになる。先生方にも精力的にやっていただいて、パワーポイントなどで説明する工夫をしていたりそういったことをやっていただいている。我々もぜひいいところを直接ＰＲして伝えたいという思いがある。ただこれを回数を増やすとなると負担的にはちょっと厳しくなる。今の回数で中身を充実させるというところであれば。

加来議長：振興会の中で例えば説明ができる人とか、そういう人材を派遣して先生方に負担をかけないように実質説明に歩くとかそういう議論はしたことがあるか。

平野校長：振興会と直接そういう話はしていない。卒業生を連れて行くのはいいのではということは振興会の事務局とも話をした。ただそれは振興会の予算の中で何とかうまく配分できるかというところで、これから具体的な説明会の内容を考えていく。

加来議長：間口が減になったりするということは本町にとっては大きな損失に繋がっていく。できるだけ４間口を維持した中で発展していく努力は町としてもやらなくてはいけない。我々も取り組まなければいけないので今日来ている。振興会だけでなく教育委員会としてもっと回数を増やしたいとかそういうことがあるのであれば、どんどん要望していくべきだと思うし、やっていただきたい。先ほど部活のボランティアの指導の話があったが、現在ほかでは何人くらいいるのか。

平野校長：アイスホッケーのほうはコーチがやっている。バレー部が２人。更に演劇部、茶道部。茶道部は特別な技術的なものなので道の予算で対応している。

加来議長：弁当等自分で用意するのが大変、通学が大変だというアンケート結果があるが、町外

から来ている人でアパートとか下宿をしている人は何％くらいいるのか。

平野校長：町内はムーミン下宿に入っているアイスホッケー部員以外にはいないはず。

原委員　：他町村から通学している子どもが多いという状況からみると保護者も朝早くから昼食だとか弁当だとか大変だと思う。高校によっては給食センターを使って無料で準備している高校も十勝管内にある。以前給食センターの給食を高校に給付をする対応について、希望したらどうかという話をしたことがある。すると学校の中に施設をつくらなくてはならないので無理だという話だった。その辺について改善がされればお母さんたちの負担も軽減されて、「清水はお弁当をつくらなくても対応してくれる」ということにも繋がってくる。施設を道につくってくれとお願いをするとか、その辺についてはどうなのか。

平野校長：大変ありがたいお話ではあるかと思うが、保護者が高校を選ぶ際の理由の優先順位というか、そういったところでいえばお弁当があるなしで清水には行かないという理由はあまりないと思う。それよりも我々は来る価値のある学校、「お弁当つくってもいいから頑張りなよ」と子どもの背中を押してくれるような学校であれば、多少のお弁当をつくるという言い方をしたら怒られるが、そういう親子の関係を３年間通わすことで非常に密になるというような効果もないわけではないかと。

加来議長：購買があった頃に、親からの話で弁当箱に 500 円玉を入れて持たせたという話もあるから、それが果たしていいのか悪いのか。パンを買って食べなさいと。

平野校長：単身赴任の私には大変ありがたいと思うが。いろいろなことを考えていただけるというのは大変ありがたい。

委員長　：町の助成がちょっとずつ増えている。検定料だとか模擬試験の費用等にけっこうお金がかかると思う。そういう面での経費というのは道立高校ではみれないのか。

平野校長：残念ながら無い。町の補助等をいただき、これによって頑張って挑戦しようという生徒が増えている。我々としても大変ありがたい。

委員長　：御影と清水の中学校の得意なスポーツだとか文化活動が清水高校でも継続してできるといったら、バドミントン、卓球、陸上、アイスホッケー。その辺を強化するためのいい指導者を校長先生がどこかから引っ張ってくるということは。

平野校長：非常に難しいところを今御指摘いただいた。高校の人事はやはり教科、年齢あたりがバランスをとらなければいけない。そしてさらに部活動となるとあと私の力によるところもあるので引き続き頑張っていかなくてはいけない。ただ、お約束ができない部分でもある。もし町にそういう方とつながりができていけば本当に継続的にできるかと思っている。学校の先生の入れ代わりにもうろたえずに、地域の文化・スポーツとして継続できる。若しくはその子たちが卒業したときに地域の文化・スポーツに参画できる・活躍できると町の文化・スポーツの振興にもなろうかと思っている。

北村委員：今年清水町で第九があったときに指導を受けた中で知ったことが、ブラスバンド部員が４名しかいない。そのうちの３名が卒業してしまうという状況。清水中学校のブラスバンドは人数もいるけれども、清水高校は部員が少ないので、先生も楽譜を工夫してつくっていると、相当な努力をされている。演奏会でＯＢの人たちも応援してやっているので、そういったことを支えるためにああいった関係をもっと広げてやっていけばいいと感じていた。あと、国際交流の関係で、アメリカのチェルシー州と盛んに交流されていた時期もあって今も続いている。もう少し高校生とかで何かできないかと感じている。こういうことがあればできるのにということがあれば我々も協力でき

る。

平野校長：そういうことに興味を持つ子はかなりいる。ただ、留学とかこちらから行く分については少し費用の面で二の足を踏んでいる子も中にはいるかと思っている。学校全体で国際化というふうに動いているわけではない。資格取得や模擬試験と同じように頑張りたいなという子に対して経済的にサポートしていただければ大変ありがたい。

北村委員：鹿追町は力を入れている。３年間の教育課程のうち、たとえば半年間だけ行っても交換留学みたいなかたちでとって、それぞれが学んだことが正規のその国の高校の卒業資格の単位に振り替えられるような仕組みというのは可能なのか。

山内教頭：そのような道の規定がある。

北村委員：経済的なサポートの関係もある。そういった方がいるかどうかというのもある。そういうことができたら、そういうことをやっていますよということが逆に学生さんを集める大きな要因になると思う。

平野校長：鹿追から来た教頭なので、そのあたりは非常に詳しい。

委員長　：ほかに特別な質疑がなければ以上で終わりたい。

・質疑終了後、清水高校学校校長の案内で、清水高等学校内の施設見学を行った。

（１１：５２～１２：２０）

【休憩　１２：２０】

【まとめ】

【再開　１３：２０】

委員長　：再開する。どうまとめていくか意見を伺う。教育委員会並びに高校のほうからたくさんの説明資料はいただいたが、それ以外に皆さんの質疑応答の中からまとめていきたい。清水高等学校の振興策について、調査を今日まとめて終了するか、また継続するかも伺いたい。できれば今日聞いた中で報告してこれで終了したいかと思うがいかがか。

（よろしいの声あり）

委員長　：それでは今回で調査終了ということで報告書をしっかり作りたい。どのように作っていくか。

原委員　：委員長と副委員長におまかせする。

佐藤局長：その前に委員の皆さんのお話を聞いてまとめないと報告ができない。

委員長　：それぞれの意見を聞く。

原委員　：まず振興会を通して町も年々補助金を増額して清水高校に支援を強めているというのは高く評価できる。今後についても今日学校長から説明を受けたことを含めてより前向きに取り組むという姿勢も鮮明にしているので、そこは今後より強めていきたい。加えて振興会と町、清水高校の三者が連携をとって清水高校が考えている方向に向けてより努力してほしいということを希望する。

奥秋委員：今年は総合学科として20年を迎え、146万円の増額をされたということで、期待の大きいところだと思う。きめ細やかに屈足のほうまでバスを配車したということで、今後に向けて１名でも多くの生徒が清水高校に来てもらえるということも期待をしてい

る。校長先生の資料説明の中でもきめ細やかな取り組みを今後に向けてやろうという自信のようなものが見受けられたので、高等学校にも期待ができる。あとは原委員が言ったようなまとめ方をしてもらってよい。

原委員　：４間口の維持については相当努力しなくてはいけないことだと思うので、このことについては町民をあげて取り組むべき。帯広の私立高校の入学者数が増えたことによって清水高校に行こうと思っていた生徒が減ったのではないかという話をしていた。はたしてそうなのか。私立高校だから学費を含めて高くなるので、財力のある家庭なのかという気もしている。今帯広から相当入っているが、新得、鹿追、芽室を含めて近隣の町村から魅力のある高校として認められてぜひ清水へという方向へ向ける努力をよりしてほしい。アンケートの結果清水高校へやりたいというというのは少ないが、実際に入ってみた結果はいい数字が出ているので、よりそういう方向に向けて努力願いたいということは添えていただきたい。

北村委員：清水高校に対する清水町総体としての支援策について、高校の振興会へ財政的な支援があるが、それだけでいいのか。今日お話を伺った中では、留学した場合に費用がかかるとかそういう話もあって、そういった奨学金制度みたいなものが考えられるか。新得、鹿追とかでそういった制度というか、自治体が出しているお金の出し方の比較も必要なのかと思う。

奥秋委員：現在のところ清水高校で留学生はいないのに、その制度がどうだという話にはならないかと思う。鹿追の場合は英語教育に力を入れているので、それを受けてのそういう制度はあるかもしれない。清水町はあくまでも総合学科で、英語とか特別な留学という話はほんのちょっと早いかと思うが委員長はどうか。

委員長　：北村委員の言われることはわからないでもないが、現状では総合学科が中心的。

北村委員：今の清水町の支援のままでいいのかどうかというところは調べてもいいかと思う。財政的なところでも。

大谷委員：現状ではあまり考えなくてもいいかと思う。今回の一番の問題は間口減を心配して行ったのが元々の話だと思う。振興会のほうもいろいろ予算を増やして努力をして、学校も学校説明会等も一生懸命やっている中で、それでもなかなか少子化の波で厳しいのかという印象を受けた。更に先ほどの高校での実習の様子を見ても生徒たちは頑張っているし、こういうことをうまく広報していく。国公立の大学への進学について、ちょっと新聞に出たことでもすごい効果はあると思う。3 人が 10 人になったり、役場での就職があるだとか、何か話題として目につくようなことが増えれば生徒募集の効果になると思う。努力していることはわかるがなかなか難しいこともあるのかという感想。

委員長　：北村委員が言われた留学へ向けての支援についてはどうか。

北村委員：具体的に制度を作れというわけではない。

委員長　：午前中、教育委員会の説明の中では、チェルシーの交流に清水高校生も入れていきたいというような話をされていた。その辺で収めてもよいかと思う。

北村委員：よろしい。

原委員　：偏差値の話をスタートにしたが、私は学力が上がらないと教育委員会が、町が、学校がやろうとしたってなんら変わらない流れが何十年もずっと続くと思う。したがって、そのために学校もいろいろ努力をしている。その成果が出てくるような努力をやはりもっとしてもらわないと。そのことができて偏差値が上がれば、清水高校はいいぞと

いうことになるのは間違いない。わざわざ帯広から来るというのは偏差値の高い学校に入れなくて清水へ流れている。その辺の学力を上げる努力をよりしてもらわないと。正直言って偏差値が 41 とは思っていなかった。まだまだ上だろうと思っていた。こんなに低いのかと思ったのであえて取り上げている。その辺どう文章化するのかを考えてほしい。

委員長　：偏差値の問題が出たが、原委員の質疑に対して校長先生は微妙な答弁をしていた。偏差値が低い以外に、公立大学に３人受かっているとか、教科の勉強の過程で学力は上がっているような話はしていた。原委員どうか。

原委員　：偏差値を決める数字の算出方法があるが、国立大学に３人入っている。この子の学力と、一番下の学力というのは相当開きがある。それでなかったら国立大学に絶対に入れない。それを狭める努力をしないとだめ。することによっていい就職口もつける。清水の役場にだって正職員として入れるように努力してほしいというのはそこにある。

委員長　：少し休憩してこの問題について意見を出し合いたい。休憩する。

【休憩　１３：３４】
【再開　１３：５０】

委員長　：再開する。偏差値の関係は原委員が言うようなことではなくて、総合学科の中で学力を上げて就職にいいようにという言い方でよろしいか。あまり偏差値の数字にこだわらないかたちにしたい。４間口維持をしながら質の向上については教育委員会も校長も言っているのでそのようにしたい。そのほかの関係で特別な意見はあるか。今日たくさん良い資料をもらった。

北村委員：高校でもらった資料の各種活動について、行事がある。こういったことが取り組まれているので、資料的にあげてもいいのではないか。町との関わりの中ではアスパラ祭りへの参加だとかがある。清水町及び外部団体との連携授業として、くらしのステップアップスクールだとか幼稚園との連携も含めて、取り組んでいることの資料を載せてもいいのではないか。

原委員　：文章の中で当然触れたほうがいいと思う。教育活動の連携事業としてこういう項目を行い、努力しているということを載せていいのではないかと思う。いろいろなことをやっているので、講座名をある程度載せて、幅広く連携した授業を行っているということは載せていいと思う。部活動の連携状況だとかいろいろある。

北村委員：部活動はアイスホッケーが盛んで清水高校との関係についても指摘されているが、それ以外に文化系でもずいぶん活躍しているので、そういうこともっとやれるようなサポート体制を考えていく必要があるということも書いていいのではないか。

奥秋委員：今いろいろ出た中で、委員長と副委員長でまとめていただければいいと思う。

委員長　：あとどうしても入れておいてほしいという意見はあるか。

原委員　：さっき言った部分の中に、ここに書いてある教育活動の連携事業として最終的に学力向上の連携等という部分があるので、ここも含めて記載をしてもらう。学力向上連携等に関しては酪農学園大学等々との連携を持ち、などいろいろ書き方があると思うが、そういうことに触れても結構だと思う。

北村委員：帯広大谷短大とか帯広畜産大学の講師の招聘の関係がないのはなぜか。

委員長　：ほかになければ事務局を入れた中で委員長、副委員長でまとめて皆さんに提示すると

いうかたちでよろしいか。

（はいという声あり）

委員長　：それではそのようにする。所管事務調査については以上で終わる。

## （２）その他

委員長　：９月定例会までに視察を行うのであれば、６月定例会で調査の申し出をしなくてはならない。また機会があるので、そのときまでに考えてきてほしい。道内視察研修１泊２日の予算はある。いい項目を挙げていただきたい。今まで皆さんから出されているものはほとんどやってきたと思うが。よろしくお願いする。

その他として、何かあるか。

（なしの声あり）

委員長　：厚生文教常任委員会をこれで終わりにする。